

黒谷和紙

黒谷和紙は、京都府北部の黒谷地方で約 800 年にわたって手作りされてきた和紙です。この谷は、かつて落ち武者が住み、冬の間の生活を補うために製紙を始めました。ここは工芸品にとって理想的な場所です。谷川は新鮮な水を供給し、寒冷な気候は楮を丈夫な繊維に育てます。

長年にわたり、黒谷の世帯の約 90%が製紙に従事していました。仕事は家族の間で分担されており、男性は楮を育て、収穫し、女性はその繊維を取り出し、紙漉きをし、木製の板の上で一枚ずつ乾燥させ和紙を仕上げてきました。子供たちは幼い頃からその技術を学び始めます。彼らは近くの川でお盆を洗うことを教えられ、まるで紙漉きをしているかのように手を動かしました。

黒谷和紙の用途は、年々、変化してきました。昔は傘や提灯、障子やその他の日用品などが和紙で作られ、着物も和紙に包まれて保管されていました。明治時代（1868 年～1912 年）に始まった養蚕業では、繭の包装に黒谷和紙が利用され、西洋化とともに伝統的な製品の需要が少なくなっていた和紙産業の維持に貢献しました。現在では、黒谷は文化財や芸術品の補修に使用される高品質な和紙を生産しています。黒谷和紙を作る職人は今や非常に少なくなっていますが、この伝統技術が忘れ去られないよう、京都府指定無形文化財に認定されました。

黒谷和紙工芸の里や黒谷和紙会館では、紙漉き体験ができます。黒谷和紙会館には、様々な製品販売と和紙の作品や資料の展示もやっています。